俺は魔人であいつは勇者で

ｈｏｚ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺は魔人であいつは勇者で

【Ｎコード】
Ｎ１３２２Ｚ

【作者名】
ｈｏｚ

【あらすじ】
魔王が倒されたことから始まる物語

魔王が打ち倒され、魔王軍に所属していたため、職を失ってしまった、魔人のカイン。
魔王を打ち倒すために、来たはずなのに道に迷い、森の中で迷子になっていた、ダメ勇者のシャル。
この二人の出会いが、後に世界の運命を変えることとなる。
さらに二人のメインキャストを添えてお送りする異世界冒険風ギャ

グテイストファンタジー。

第1話　俺はニートでこれが始まりで

『勇者によって魔王は倒された』

普通なら物語の終わりを告げるはずのこの言葉、しかし俺にとっては違う、俺にとってはこれから新たな就職先を探すという何とも面倒な物語の始まりなわけだ。

俺の名前はカイン、何？　フルネーム？　そんなもん長すぎて忘れたとりあえずカイン、たった今職を失った哀れな魔人だ。おかげで俺の黒い瞳は死んだ魚のようになっている。

さっきまでの肩書きは３４番目の魔王軍第三大隊隊長っていう無駄に豪華な肩書を持っていたわけだが今魔王が倒されたから魔王軍はこれで解散、よって新しい仕事を探さにゃいかん訳だ。

お、俺の元部下が俺のところにきたみたいだ。

「隊長、これからどうしましょう？」

「おい、俺は隊長じゃない元隊長だ、そこんところ間違うなよ。これからどうするってどうしようもないだろ」

「ですよねぇー、じゃあ自分は実家帰って畑仕事でも手伝おうかな」

「そうしろそうしろ、親孝行してこい」

さっきから俺のところにこうやって何人も相談しにきやがる、大変なのは俺もだっつーの。それにしても勇者もひどいもんだ、数千人の勇者が一斉に攻め込んできてどうやって、戦えってんだよ、魔王なんて、ただの金持ちの馬鹿か、歳とった爺さんがほとんどだっていうのに、攻め込まれて勝てる訳ねぇだろ。

最近の魔王はみんな魔王名乗って数ヶ月でくたばるから、魔王軍に入ったって全然稼げやしない、なんか人間の間じゃ魔王を打ち取った英雄は随分といい待遇を受けれるらしいから、血眼になって突撃してくるし、怖くて岩陰に隠れてるか死んだふりするのが関の山だ。

とりあえず城の宝物庫でも漁って何かもらって家帰るか。

と、思ってきてみたんだが勇者どもが宝奪い合って殺しあってやがる、うー、こわっこんなところ居られるかよ、さっさと逃げようっと。

ここで俺は重大なミスをしちまうわけだ、何かって？　こけたんだよ、それも盛大に。鎧を着てるせいでうるさいからすぐばれちまう。

まぁ、魔王を倒せなくて少しでも稼ぎたい奴の前に魔王軍の元隊長が転がり込んできたんだ、向こうは手柄建てるチャンスだと思って突撃してくるよなそりゃ、あははは……

あーこわっ、勇者こわっ、あれはもう勇者というより金と権力の亡者だろ。あんな鬼ごっこもう二度としたくない、てか、もう追いかけてきてないよね？　まだ追いかけて来てたら俺もう泣くよ？　いやマジで。

うん、とりあえずは大丈夫そうだ、こんな隊長マーク付いた鎧なんて着てるんじゃなかった、よしもう寄り道せずに帰ろう、まっすぐ帰ろう。

俺は黒い髪に着いた土を払い、立ち上がり岐路に着く。

歩くこと２０分我が家にとうちゃーく、とはいっても家族もいな

いし別に特に何もすることないから、もう寝よう。

その日の夢で勇者どもに追いかけられる夢を見て、朝起きたら枕がぬれてた、泣くって言ったけど本当に泣くとは思わなかった。

さて、仕事探しに街でも行くか、おっと朝飯、朝飯。とりあえず俺はパンに何もつけずに食ってすぐに家を出た、今は仕事見つかるまで節約しないとな。

俺は職を探すために俺の家から歩いて5分ほどの街に来てみた、石畳の道に石造りの家屋、街頭には鉄塔の上に魔石がつけられているだけのシンプルなものだが夜にはそれなりに明るくなる。

それにしてもおかしい、街に昨日まであふれていた求人広告がすべて撤去されている、きっと風で飛んでったんだよね、うんそうだよね。

とりあえず知り合いの店を回ってみたが、すべての店でもう働き手は足りてるって言われたよ、やべーよ、このままだと俺餓死するよ？　マジで生きてけないよ？　しょうがないから森で何か仕留めてくるか、このままパンだけの生活っていうのもむなしいし。

森の中に入ってもう1時間は経つが、いまだに猪一匹出てこない、木の実ばっかり集まったけど、肉が食いたい！　俺はベジタリアンじゃない！

それからしばらくさまよっていると、遠吠えが聞こえてきた。

もうその時の俺は肉が欲しくてたまらなかったから、もういっそのこと狼でも何でもいいと思って遠吠えの聞こえてきたほうへと駆けだしちまったんだ。いやはや、今思うと軽率だったもう少し考え

て行動すべきだった。

とにかく走っていると狼型の魔物が誰かを襲ってるのを見つけちまったんだよ、ここで見捨てるほど俺は開く人に慣れないわけで、すまん嘘だ、ただ肉を食いたかっただけだったと思う。

まあ、一応隊長なんてやってたんだそれなりには強いんだよ俺って、そこら辺の魔物風情に遅れなんかとらねぇんだぜ。

ここで出すのは、俺の十八番、加圧魔法、こいつを使えば大抵のやつは動けなくなるし動けたとしてもかなり動きは鈍る、こいつを使って今まで逃げ延びてきたといっても過言ではない。当然大したこともない魔物だから地面にへばりついて動けなくなるわけだ、さて、こいつらを持って帰る前に一つ感謝でもされておくか。

「おい、あんた大丈夫か？」

俺はさっきまで襲われていたやつを見ると、なんと女じゃねぇか、しかもかなりかわいい、金髪碧眼ロングヘアー、来てる鎧は、まだ新しそうだ、腰には1メートルほどの両刃の直刀携え、背中には弓と箙（えびら）、こんだけの装備しててこんな魔物相手に苦戦してたのかよ、ずいぶん弱い奴だな。

俺なんて適当な麻の服だってのに、こいつより強いんじゃないのか？

「ありがとう、それにしてもすごい魔法ね」

そう言いながら、こっちに近づいてくるその女を見ていて何か違和感を覚える、なんていうんだろうかこれは、何かがおかしい。

「まあな、これでも魔王軍の隊長やってたんだぜ」

そういって自慢げに笑った瞬間に、女の表情が変わり剣を振り上げる。

けど、振り上げすぎて後ろにこけやがった。

「だ、だましたわね」

さっきから、何かおかしいと思っていたがもしかしてこいつ……

「お前、勇者かっ！？」

「そうよ、この魔王の手下め、私が成敗してやる」

正確には元手下だ、ついでに行っちまえばこいつには倒される気がしない、とりあえず加圧魔法っと。

「えいっ」

「きゃあ、ちょっとなによこれ」

ああ、やっぱり動けないか、なんだか見ててだんだんかわいそうになってきた。魔法といておくか。

魔法を解いてみたが立ち上がろうとしない、まさか今ので殺しちまったなんてことはないだろうな？　今まで数多くの戦場に立ってきたが殺したことがないことが自慢だった俺がまさか、こんなところで殺しちまったのか？

不安になって俺はその女に近づき様子を伺う。

「ひっく、うぅ〜」

あれ、もしかして泣いてる？

「あの〜」

「なによー、どうせ私は落ちこぼれのダメ勇者よ、魔物に襲われてるところを敵に助けられるようなダメダメ勇者よー」

ああ、泣いてるよ、完全に泣いてるよどうしようこのままだと完全に俺悪者だよね、でもここで殺されてあげるっていうのも変だし……えーっと。

「泣くな！！」

「ひっく……うぅ……」

あ、泣き止んだていうか、すごい我慢してる。

「いいか、俺だってすごーくダメな魔人だった、でも今では隊長になれるくらいにまでなった、だからお前も変われる頑張れ！」

正確には隊長は狙われやすいから、くじ引きで負けたやつがなったんだけど嘘はついてない、だいたい俺この加圧魔法以外つかえないし。

「頑張る……」

うん、泣き止んでよかったこのまま帰ってこのことが知れたら、女泣かせた男として有名になっちまうとこだったぜ。

「私、頑張って、魔王を倒す」
「あ、魔王ならもう打ち取られたよ」

しばしのあいだ、沈黙が続いた。

「えっーーーー！　じゃあ、あたしは何を目指して頑張ればいいのよ！？」
「知るかボケ、自分で考えろ！」
「もういい、帰る」

そう言って、女は歩き出したのだが……

「おい」
「なによ、もう帰るんだから放っておいてよ」
「いや、そっち行くと魔人の村だぞ」

再び沈黙

「お前、もしかして帰り道解らないのか？」

女はこくりと頷き、うつむいている。
あ、また泣きそうになってきた。

「案内して……」
「いや、人間の街のほうに行ったら俺狩られるから無理」

あ、目に涙たまってきた。

「えっと、とりあえず俺の家来るか？　えーと、名前は？」

「シャル……」

これがこいつとの出会いだ、何とも間抜けのこの勇者との出会いが俺の人生どころか世界を変えるきっかけになるなんて誰が思っただろうか、だれも思うわけねぇよな……

第2話　俺は家主であいつは偉そうで

さて、シャルを俺の家につれてきたわけだが、なぜか我が物顔で椅子に座って足を組んでいやがる、なぜこいつはこんなに偉そうなのだろう、もっとこう、部屋の隅で体育座りでもしているのがふさわしいような状況だというのに。

「ちょっと、あんたの名前聞いてなかったわね、おしえなさいよ」

なぜ、こんなに高圧的なんだこのダメ勇者は？

「カインだよ」

「そう、じゃあカイン、お茶出して」

なぜ、俺が命令されているのだろうか、確かに客人を招いたのだから茶の一つや二つ出すが、まあいいや、とりあえず出しておこう。

「はい、どうぞ」

シャルの目の前にティーカップに入れた紅茶を置くと、シャルは早速一口飲んですぐにカップを置いた。

「なにこれ？」

ん？　虫でも入っていたのだろうか？　いやまさか俺に限ってそんなへまをやらかすわけがない。

「こんなまずい紅茶初めて飲んだわ」

「馬鹿言うな、家で一番高い紅茶だぞ」

なんてこった、客人用のうちで一番高いとはいっても、もう一種類しかないけど、とりあえずこれがまずいだと。
俺はティーポットから自分のカップに注ぎ一口飲んでみる。
うん、うまい茶葉の量、お湯の温度共に最適だったのがよくわかる、これがまずいのだったらこいつはいったい今までどんな紅茶を飲んできたんだ？
「もういいわ、さっきので汗かいちゃったからお風呂貸して」
「そこの、扉の奥が風呂だ、お湯は沸かしてやるよ」
ここまで、言われても優しくする俺って寛大だな、いやほんと。
シャルは俺の指差した扉を開け、すぐに閉めた。
「何よ、あの狭くて汚いお風呂は！？」
「いや、普通だろ……」
「あれが普通だっていうの？　見るからに貧乏そうな格好してると思ったら本当に貧乏人なのね、もういいから昼食の用意して」
さすがの寛大な俺もさすがにこれには頭に来たよ、もう怒った。
俺はシャルの襟をつかんで家の外に放り投げてやった。
「ちょっとなにするのよ！？」
「こんな貧乏人にかまわずどうぞさっさとお帰りください、ほら荷物」
そういって剣と弓と箙（えびら）を投げて扉を閉めた。

「ちょっと入れなさいよ！」

そういいながらシャルが扉をたたいてくるが、もう無視だ、このまま夜の森で魔物にでも食われてしまえ。

それからしばらくの間扉をたたきながらシャルはギャーギャーわめいていたが、諦めたのか扉をたたく音も声も聞こえなくなった。少しばかり罪悪感はあるが、あんなことを言われてまで面倒を見てやるような理由などない、大体あいつは勇者なのだから、そこらで死のうがあいつの責任だ。

それでも非情になりきれないのが俺ってやつで、少し心配になって扉を開けて外の様子を伺ってみる、
家の前にはいないようだがいったいどこに行ったのだろうか？

とりあえず俺は家を出て森の中へと歩きだした、決してシャルが心配だからじゃないぞ、食材探しだからな、間違うなよ！

森を歩くこと数分、適当に木の実を集めながら歩いていると、誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。こっそりと近寄り見てみると、予想通りシャルが木の下で体育座りをして泣いていた。

「うぅ……ひっく……かえれないよ……」

もう反省しただろう、からそろそろ許してやるか。

「おい、シャル」

俺が話しかけると、シャルはあわてて涙をぬぐい赤くなった目で睨

んできた

「なによ、カインは敵なんだから話しかけないでよ」

面倒くさいやつだなこいつは。

「そうかいそうかい、俺は敵だから話しかけるなと。せっかく許してやろうと思って迎えに来たのにとんだ無駄骨だったな、じゃあな」

そういって、俺が振り返り、家に帰るフリをするとシャルが慌て出す。

「ちょ、ちょっとまってよ」

「なんだ？　敵の俺に用か？」

なんだかいじめるのが楽しくなってきた、もうしばらくいじめるとするか。

「いや、その」

「なんもないなら帰るぞ」

「ちょっと待ってって言ってるでしょ！」

「ならなんだよ？」

このままじゃ埒があかなそうだな、しょうがないからもうやめてやるか。

「あ、あんた私の仲間になりなさい！」

「は！？」

今こいつなんて言った？　もしかして俺の耳がおかしくなったのか？

「仲間なら何の問題もないから仲間になれって言ってるのよ」

またこいつはぶっ飛んだ発想を、開いた口がふさがらねぇよ。

「勇者の仲間に魔人なんて聞いたことがねぇぞ？」

「それは今までの勇者、私はそんな奴らとは違うの」

その弱さは確かのほかのやつらとは違うな。

「それで、仲間になるの？　ならないの？」

ここでならないって言ったらまた面倒なことになるよな。

「はいはい、仲間になりますよ」

「ほ、ほんと？」

いいって言われると思ってなかったのかこいつは？

「へーへー、ほんとです」

「じゃ、じゃあカインの家に行ってもいいの？」

だんだん目が輝いてきたなこいつ。

「仲間なんだからいんじゃないの？」

「そ、そうよね仲間だもんね」

「あ、でもあんまりわがままだったら仲間やめるから」

「わ、わかったわ気をつける」

こうして結局シャルは俺の家に帰ってきたわけだ。

「風呂入るか？」

「うん」

実に素直でよろしい。

「そうか、そこのタオル使っていいぞ」

「のぞかないでよ」

「のぞかねぇから早く行け」

まったく、そこまで俺は落ちぶれちゃいねぇっての、さて、今のうちに買い物済ませてくるか。

買い物から帰ってきたがまだ、風呂から上がって来てはないみたいだ。俺は脱衣所の扉をノックする。

「なによ？」

「脱衣所に適当な着替えおいとくから」

「わかったわ」

俺は女の服などわからないから、適当に店で見繕ってもらったが大丈夫だろうか。とりあえず今のうちに飯でも作っておくか。

しばらくして、風呂から出てきたシャルは俺の置いておいた、青を基調としたワンピースを着て出てきた、特に文句は言わないからよかったんだとしておこう。

「ほれ、かなり遅いが昼飯だ」

「ありがとう」

そう言ってさらにパンとさっきの魔物の肉を焼いたものに果物で作ったソースをかけた料理を渡したら一切文句を言わずに食べた、さすがに魔物の肉は文句言うと思ったんだがな。

夜になり、寝る場所が俺の使っていたベッド以外にないことに気付き、さすがにシャルを床で寝させるわけにもいかないので、ベッドをシャルにやって俺は床の上で毛布にくるまって寝た。

次の日の朝、体がすごい痛かったが自分で招いた結果なのだからと我慢するとしよう。

第3話　こいつはバカで、腐れ縁で

燦々（さんさん）と降り注ぐ火の光の中、俺は一人くわをふるう。魔王軍にいた三ヶ月間は家に帰ることもなかったので、俺の家の畑は雑草だらけでとてもそのままじゃ使えそうな代物じゃなかった。

ちなみにどこぞのへっぽこ勇者は、もうすぐ昼だっていうのに家の中でまだ寝ていやがる。あいつ野宿したら魔物に襲われてすぐにくたばるんじゃないだろうか？

「おし、取り合えずはきれいになったな」

一面をきれいに掘り起し、なんとか畑として再び使えそうにはなった、そもそも街から少し離れた位置に家を建てたのだって、ここの土質がいいからだったのだから、畑を作らなくては無駄になってしまう。

俺は掘り起こした時に、芋がいくつか出てきたので今日の食事はこれを使おうと思う。

俺はくわを納屋に戻し家の中へと戻るとシャルはまだ寝ていた。起こしてなんか文句言われても嫌なので俺はそのまま風呂に入り、昼食を作り始める。

昨日捕まえた魔物の肉なのだが、思っていたよりもうまかったのでこれから肉に関してはあまり困ることはなさそうだ。まあ、できればもっとまともな肉が食いたかったが。

薄く切った肉を焼いて、その上に卵を落とし塩、こしょうで味付

け簡単だが、ニートの俺には十分贅沢な食事だ。

「おい、飯で来たぞ」

布団の中で、もぞもぞと動くものの出てくる気配は一向にない。

「じゃあ、お前の飯はなしな」

「食べるー……」

そう言いながら、シャルは上半身を起こした。

「まず、顔洗ってこい」

「はーい……」

シャルはふらふらしながら洗面所へと向かい俺はその間にパンを切り、二人分の食事の用意をする。

「カイン、おはよー」

「ああ、おはようもう昼だけどな」

あいさつをしながら俺の正面の席に座り、手を合わせる。

「いただきます」

「どーぞ、召し上がれ」

こういうところはしっかりしてる所を見ると、一応それなりの躾は受けてきたのだろう。

「なあ、シャルお前どうやって帰るんだ？」

正直な話、そう何日も人を泊めてやるだけの金の余裕はない、できることなら自分で帰れるようになってもらいたいが、年間で数百人も遭難者を出しているあの樹海を通って人間の国のほうまで帰るのは森を熟知していないととてもできたもんじゃない。

「どうやっても何も、一人じゃ帰れないもん」

なぜこいつはこんなにも自信満々に帰れないことを言うのだろうか、せめて申しわけなさそうに言うぐらいのことはできないのだろうか？

「俺は送っていけねぇぞ、そんなことしたら俺がくたばっちまう」

「そのことなんだけど、私気付いたの」

いったい何に気付いたというんだ？　あまり面倒でないことならいいんだが。

「私とあなたの違いってせいぜい耳の形くらいなのよ」

確かに俺たちの耳は横にとがってるけど、人間の耳はとがってない、そのほかにどんな違いがあるのかはパッと見わからないな。

「だから、フードでも被ってればばれないわ、それにばれたとしても捕虜だっていえば殺されることはないだろうし」

ああ、こいつは魔王城で暴れまわるあの勇者どもを見ていないんだな、むしろあれは強盗に近い。あんあな奴らの前で魔人の捕虜なんて見せたら、一瞬で首は寝られておしまいだ。まあ、フード被ればばれないだろうってのには賛成だが。

「だからお願い、送っていって」

両手を合わせて、頼むその姿は必死そのもの、ここまでされて断れたら最初から家になんて連れてきてないっての。

「わかったよ」

俺のこの一言を聞きシャルの顔が輝く、全く分かりやすい奴だ。せっかく掘り起こした畑もまたしばらく使えないのか。乗りかかった船だ最後まで付き合うとするか。

「ありがとー」

そう言ってテーブルを挟んで俺の手を握りぶんぶんとまるで子供のようにシャルは振り回す。

「じゃあ準備しないといけないな、お前は何か欲しいものあるか？」
「大丈夫よ、大抵のものは持ってるし」
「そうか、じゃあ俺は買い物行ってくるから留守番しといてくれ」

そう言って俺は、街へと向かった、あの森を抜けるのならついでに人間の街なども見てみたい、人間がどうやって生活しているのか。この前までは全く気にしてなどいなかったが、シャルに出会ってからは人間というものの理解も変わってきた、もしかしたら俺たち魔人と人間は理解しあえるのではないだろうかなんてね、そんなうまくいくわけねぇな。

とりあえずフード付きのマントや、携帯食料を買い込み俺は家へと戻る。

「ただいまー」

あれ、返事がない、風呂も使ってないみたいだし。

そんなことを考えていると、森の方で爆発音がして鳥たちが騒ぎながら飛び立つ。

「なんだか面倒なことになってそうだな」

俺は荷物を置きすぐに走り出した。

森の中からは爆発の音が絶えず聞こえる、急がないとかなりやばいかもなこりゃ。馬鹿でかい音を鳴らしてくれるおかげでどこにいるのかはすぐにわかるので、俺は迷わずに走る。

俺の予想だと、間違いなくあいつだ、こんな時に限って俺んところに来やがって、くそっ。

走ること、数分ようやく走って走って逃げているシャルとそれを追う銀髪の男を見つける。

やっぱり、あいつだったか。

「ちょっと待ったー」

俺は大声で叫ぶが、爆発の音が大きすぎて声がかき消される。

ああ、もういいや、加圧魔法で……

俺が加圧魔法を使うと、銀髪の男は突然の上からの圧力に体勢を崩し地面にうつぶせになる。

「おい、ソルドお前は何やってんだ？」

俺はそう言いながら魔法を解除する。

「何すんだよ、俺はお前の家に侵入してたこそ泥勇者を退治してやろうと」

大方そんなところだろうと思ったよ、今俺の目の前にいる銀髪に赤い目して、俺同様に安そうな麻の服を着た褐色の肌のこの魔人の名前はソルド。一応、ガキの頃からの知り合いだ。

「誰がこそ泥よ！」

シャルは木の陰から顔だけを出して反論する、できれば今は面倒なことになるからやめてもらいたい。

「ほらあいつだよ、任せとけ、今俺がやっつけてやる」

そう言いながらソルドは右手をシャルの方に向け手のひらから火弾を飛ばそうとする、それを見てシャルはおびえて気の後ろに隠れてしまった。

「だから、やめろっての」

とりあえず俺はやめさせるために、もう一度、加圧魔法を使う。

「なにすんだよ！？」

「いいからお前は手を出すな、おい、シャルもう出てきていいぞ」

「ほ、ほんと」

おびえた小動物のように、シャルは木の陰から顔をのぞかせる。

「ほんとだから安心しろ。ソルドは手出すなよ」
「え？　知り合い？」
ソルドは状況が飲み込めていないのか、俺とシャルを交互に見つめる。
これから、この馬鹿に説明しないといけないのかと思うと、少し憂鬱になってくる、誰でもいいから助けてくれないかな……

第４話　あいつは勇者で、ダメダメで

とりあえず俺の家に戻って、説明すること１５分。やっとのことでソルドが理解してくれたが、どっと疲れが襲ってきて俺は椅子の背もたれによりかかる。

「いやー、なんか誤解しちゃってごめんな」
「まったくよ、死ぬかと思ったじゃない」

普通の勇者なら立ち向かうところを、逃げるあたりこいつのダメさが表れているな。

「それで、出発はいつするんだよ？」

そういえば決めてなかったな、できるだけ早いほうがいいなー。いつまでもいられたら俺が破算しちまう。

「いつにするシャル？」
「そうねー、別に私はいつでもいいけど」
「じゃあ、あしたでいいか？」
「いいわよ」

さてこれで決まりだな。俺は洗濯物をしまいに立ち上がった時にソルドのバカが叫びだす。

「ちょいまて！」
「なんだよ？　何か用事でもあるのか？」
「いや、明日はやめておこう」
「なんでお前が決めるんだよ？」

まさか、こいつ、ついてくるとか言わないよな？

「俺もついていくからに決まってんだろ」

やっぱりか、ソルドがいるといつも面倒なことになるからあんまりついてきてほしくないんだが。

「ダメだ」

「なんでだよ、お前だけ若い女と一緒に、二人仲好くなんてそんなのゆるさねぇぞ」

こいつは全くこんな発想しかできねぇのかよ、だからバカって言われるんだよ。

「若いって言ってもよー、おい、シャル今何歳だ？」

「１８よ」

「ほら、１８だってよ……１８！？」

「な、何よ、別に普通でしょ？　カインだって同じくらいでしょ？」

「俺とソルドは２４だ」

「うそっ、だって見た目は私と大差ないじゃない！？」

確かに見た目は俺たちと大差ない、もしかしてシャルって老け顔なのか？　それとも……

「なあ、人間の平均寿命ってどれくらいだ？」

「え、そうね、８０歳くらいかしら」

「なるほどな、俺たち魔人の平均寿命は１００ちょいだ」

「そうなの？」

長生きすれば１２０とかも普通だからな、８０なんて早すぎるくらいだ。

「簡単な話、俺たち魔人のほうが老化も成長も遅いってことだな」

「なにそれ、ずるーい」

ずるいといわれても、種族の違いなのだからしょうがないだろ……

「おい、俺のこと無視するなよ」

ソルドが騒ぎ始めたな、せっかく話題をすり替えたというのに、また話を戻しやがったなこいつ。

「そんなに来たいのか？」

ソルドは首を縦に激しく振る、このまま放っておいたら具合悪くなって諦めないかな、あ、だんだん遅くなってきた。

「おい、シャルどうする？」

「え？　別にいいけど」

まあ、シャルがいいならいいか。

「いいってよ、とりあえず明後日でいいのか？」

こちらに笑顔を向けるが、その顔は頭の降りすぎで具合悪そうだ。

「うっぷ、明後日で大丈夫だ……」

「わかったから、じゃあ明後日の朝６時、うちに来いよ」

そういって、俺はソルドの腕をつかみ立ち上がらせ、家から追い出し、シャルのほうに向き直る。

「ということで、出発は明後日だ」

「わかったわ、それまでには準備しておく」

ということで時は流れて、明後日の朝

「あいつ遅いな、もう置いていくか？」

おれは腕を組み、足を小刻みに動かしながら、ソルドを家の前で待っている。既に俺の懐中時計は、６時２０分を指している。

「ねむい……」

さっきからシャルはこればかりだ、本当に朝に弱いなこいつは。そんなことを思いながら待つこと２０分、やっとあのバカが走ってやってくるのが目に入った。

「遅いぞ」

「悪い寝坊した」

こいつはやっぱりおいて行ってもよかったんじゃないのか？　まあ少しでも戦力はいたほうがいいのは確かだが、こいつだって一応戦えるわけだし。

「ほらいくぞ、シャルもシャキッとしろ」

「うん……ふぁ～～」

こいつら本当に大丈夫なのか？　なんか先行き不安だな……

「ねぇー、まだ森抜けないのー？」
「まだだ、さっきも言っただろうが」
「だって、何時間歩いてるのよ、もう足疲れてきちゃった」

こいつこの時間の歩行で疲れるのに魔王倒そうと思ってたのか？
こいつにだけは絶対に魔王は倒せないだろ、ていうか魔王城までたどり着けないだろ。

「いったん、休憩にしましょうよー」
「そうだそうだー」

おい、ソルド貴様は別にそこまで疲れてないだろ、なんで俺だけ敵にしようとしてんだ？
俺は、懐中時計を取りだし時間を確認する。
確かに、もう2時間は歩いたし、そろそろ休憩しておくか。

「わかった、休憩にしよう」
「やったー」

シャルが笑顔で近くの切り株に座ろうとするが、俺はシャルの腕をつかんでその邪魔をする。

「何よ！？」
「休憩の前に、戦闘だ」

その言葉と同時にソルドが茂みの中に向かって火弾を放つ。
爆発と同時に魔物のうなり声が聞こえてくる。

「ほら来るぞ、しっかりしろよ勇者様」

茂みの中から飛び出してきたのは、頭に一本の角を生やした3メートルほどのクマの魔物。このていどなら何の問題もなく倒せるだろう。

俺はとりあえず加圧魔法を使ってみるが、速度がわずかに落ちる程度で大して効果がない。

いくら威力を押さえているとはいえ、ここまで聞かないと自信を無くしちまいそうだ。

「ちょ、ちょっと全然魔法聞いてないじゃない！」

「お前の腕試しだ、手伝ってやるからとりあえず倒してみろ」

どうせ無理だろうけど、どの程度戦えるのかは見ておいた方が今後のためにもなるしな。

「無理、ムリムリ、ぜったいむりー」

そう言いながら、シャルは逃げ出す。

「お前、本当に勇者か？」

「あんなの無理に決まってるでしょ、ちょっと助けてよ！」

ソルドも呆れて、開いた口が閉まらないよ。

「おい、カインどーすんだあれ？」

「どーするも何も、このまま放っておくわけにもいかないだろ」

とりあえずもう少し強めに魔法を使っておくか。

魔物は先ほどとは比べ物にならないほどの重圧に、地に伏せる。

「シャル、とりあえずお前がトドメさせ」
「う、うん」

シャルは剣を振り上げるが、腰が引けている。あんなので倒せるのだろうか？

「えいっ」

思いっ切り振り下ろした剣は魔物の頭に命中するが、薄皮を斬ったていどで、仕留めるには至っていない。

「シャルちょっとこっち来い」

俺が手招きをすると、こちらにシャルが駆け寄ってくる。

「ソルド頼む」
「ほいよ」

そういってソルドはひときわ大きい火弾を放ち、魔物に命中させると、魔物の体が炎に包まれる。魔物の悲痛な鳴き声はすぐにやんだ。

「あんたたちって、結構強いのね」

少し感動したようにシャルがそう言ってきたが、俺たちは二人合わせてため息を吐く。

「「お前が弱すぎるんだよ……」」

この俺たち二人の想いが、こいつに届くときは来るのだろう、とりあえず戦力としては全く使えないってことだけは分かった。

第5話　俺達は歩いて、街までついて

先ほどの戦闘から約1時間、あのあとは魔物に出会うこともなく順調に進んできている。

「ねえ、あれってもしかして出口」

そう言って、シャルが指し示す先の方では確かに森が途絶えている。

「たぶんそうだな」

この森は普段なら歩いて2時間半ほどで抜けれる距離だから普段と比べれば遅いが、鎧をきたシャルがいるからこんなもんだろう。

森を抜けると、そこには見渡す限りの平原が広がっていた。遠くの方には馬車らしきものも見えるのであそこに街道があるのだろう。

「とりあえずは一安心だな、ここからは、道案内頼むぞシャル」

「まかせなさい」

それから、歩くこと1時間、なぜ今、俺たちはさっきの森の前にいるんだ？

「あ、あれぇ？　お、おかしいなぁ……」

シャルの声が若干震えているのは気のせい、ではなさそうだな。

「シャルさんや、もしかしてまた迷子かい？」

俺がそういうとシャルは頭を掻きながら、苦笑いする。

「そう、みたい」

「そうかそうか」

よーし、一旦深呼吸だ、吸ってー、吐いてー、もういっちょ、吸ってー、吐いてー。

「どうするんだよ！？」

ソルドなんて、もうめんどくさそうにそこら辺に寝転がっちゃったよ？　全くこのダメ勇者はとことんまでダメ勇者だな。

「そんなこと言ったってしょうがないじゃない！」

もう呆れて言葉も出ないよ……

「とりあえず、向こうの方に行ったら街道があるんだろうから、そこ行くぞ」

「え、街道があるの？」

こいつはさっきの馬車を見てなかったのか？　もう本当に不安になってきた。

「ほんとに街道だ！　それで、この街道はどこの街につながってるの？」

「それを教えるのは、お前の仕事だろう？」

「街道なんて、どこも同じだからわからないわよ」

俺らが言い合いをしていると、ソルドが口を挟んでくる。

「シャルは地図とか持ってないの？」

このダメ勇者がそんな便利なもの……

「あるわよ」

ほらあった……

「あるのかよ！」

「な、なによ持ってってもいいじゃない」

こいつはなんで、もっと早くそれを出さないんだよ。ていうかこいつよりこいつの道具のほうがよっぽど役に立つんじゃないか？

とりあえず俺はシャルから地図を受け取り広げてみる。なんで俺が見るのかって？　シャルに地図読ませるのは多分無理だろ。

「とりあえず、さっきの森がここだから今歩いてきて……よし、どこにいるかは分かったぞ。それでお前の街はどこだよ？」

地図に書いてある文字が読めないからとりあえず、指さしてもらおうと思い、シャルに地図を見せる。

「えーっと、ここよ」

そう言ってシャルが指差した位置は、ここからそれほど遠くはない位置のようだ。もっとも地図上で遠くないだけであって実際の距離はかなりあるはずだが。

「よしじゃあ、行くか」

それから、もう2時間が経つが未だに街は見えてこない。

「ねえー、もうお昼にしましょうよー」

「俺も腹減ったー」

時間的にもちょうどいいし、ここなら魔物が来てもすぐに発見できる分、安全だな。

「そうだな、じゃあ飯にするか」

俺は、カバンから干し肉とパンを取りだしシャルとソルドに渡す。

「これだけ？」

いかにも不服そうな顔のシャルだが、文句を言われてもこれ以外に出せるものはない。

「旅の間なんてふつうこんなもんしか食えないだろ？」

「わかったわよ」

いかにも、不満たっぷりといった表情でシャルはパンをちぎって口に運ぶ。

「おかわりー」

「そんなもんはない！」

ソルドのやつに自由に食わせてたら、食料がいくらあっても、足りやしない。胃袋が、異次元にでもつながってるんじゃないかと思

うほどに食うからな、こいつは。

食事を終え歩くこと2時間ようやく街の姿が見えてきた。

「シャル、あれがお前の住んでた街か？」

すでに歩き疲れたシャルは剣を杖代わりにしており、俺が話しかけると下に向けていた視線を上げ次第に笑顔になる。

「そうよあれよ、ほら、二人ともあと少しよ」

さっきまで一番後ろを歩いていたくせに、急に元気になって走り出す。もっとも、それから数分後にはまた、シャルが一番後ろを歩くことになるんだがな。

「何よ、全然近づかないじゃない……」

「そりゃ、まだあんな小さいんだから当分はつかないだろ？」

「もう、いや……」

「お前、よくあの森までこれたな？」

「そ、それは……」

シャルは視線を逸らし明らかに動揺している。何か理由があるのは確かだが、その理由を言いたくなさそうなのも確かだ。

こうゆう時に限って、ソルドは無駄に鋭くなるんだよ。

「もしかして、魔物に追いかけられて逃げてたら、あんなところに着いたとかだったりしてー」

そう言いながら笑うソルドと、それを聞いて一瞬肩を震わせ、目を泳がせるシャル。

ああ、これは図星だな。

「お前ほんと、なんで勇者になったんだ？」

「う、うるさいわね」

それからも歩き続け、ようやく街にたどり着く。

街はかなりの高さの石造りの城壁に囲まれており、街は中心に行くにつれて高くなるように段々に作られているようだ。

俺とソルドは初めてこんな大きな街を見たので、見上げたまま固まってしまった。

「何やってんの？　早くいくわよ」

「お、おう」

俺とソルドはフードを深くかぶりシャルについて行く。

シャルの歩いていく方向には鉄製の門があり門番もいる、このままいったらばれるのではないだろうか？

そんなことを気にしていると、門番は俺たちに近づいてくる。

「身分証みしてくれ」

門番は随分とだるそうに話しかけてきた、こんなところでずっと待っているのだ、そりゃいやにもなるよな。

「はい、これでいい？」

「えーっと、勇者のシャルロッテ・グレイン・ローゼリアス。ああ、ローゼリアス家の娘さんでしたか、そちらの二人は？」

一瞬、俺は緊張するが、シャルは何事もないかのように平然とした顔で答える。

「私の従者よ」
「なるほど、これはお返ししますね」
「どうも」

そう言って、シャルは歩き出し、俺たちもそれについていく。門が開くのかと、期待していたら門の横の小さな扉を開けて街の中へと入っていった。

第6話　ここは敵地で、あいつは金持ちで

街の中の様子は俺たちの街に似ているが、すべてにおいて質が向上しているように見える。石畳一つ一つの大きさも等しく並べ方も均等である、石造りの家屋も皆綺麗に作られており、建築技術の高さがうかがえる。

俺とソルドは魔人の街とは比べ物にならないくらいに綺麗な街並みに見とれて、あっちこっちを見てしまう、フードをかぶっていることもあって余計に目立ってしまう。当然街には多くの人がいるので、俺とソルドを不思議な目で見る人もいる。そんな様子を見てシャルが顔をしかめて耳打ちしてくる。

「ちょっと、あんまり目立たないようにしてよ」
「ああ、悪い悪い、あんまりにもすごかったもんで、つい」
「もう、気を付けてよね」

それでも、ついキョロキョロしてしまい、なんどもシャルに怒られた。

街は3段構造になっているようで、次の段に行くには街の中心にある階段を上ってしか行けないようになってるみたいだな。上の段に行けばいくほど街の作りはより繊細になっていき、建物一つ一つが大きくなっていく。

3段目のところまで登ってくると、すでに建物一つ一つが芸術品のようで、かなりの大きさである、あんなものをどうやって立てるのだろうか本当に人間たちの建設技術はすごいな。

「ところで、お前の家ってどこだ？」

「もう着いたは」

そう言ってシャルが立ち止まったところは、これまたかなりでかい家の門の前だった。

「シャル、お前って金持ちだったんだな」
「まあ、一応貴族だしね」
「きぞく？」
「そう、貴族よ」

きぞくってなんだ？　人間たちは金持ちのことをそう呼ぶのか？
なぜだかシャルが少し誇らしげな顔をしてるが理由がわからない。
ソルドもわからなかったようで、俺に耳打ちで聞いてくる。

「なあ、きぞくってなんだ？」
「わからないが、たぶん金持ちのことじゃないか？」
「なるほどな、シャルは金持ちだったのか」

よく考えれば、それらしい言動はしてたな。
俺たちが二人がこそこそ話してるのを訝しげにシャルが見ている。

「何の話してるのよ？」
「「いや、なんでもない」」

シャルは釈然としていないよう顔をしていたが諦めたのか、ため息をつき門へと近づき、門の横につけられているボタンを押した。

「シャルです、今戻りました」

なるほど、あれは通信魔法の起動スイッチか。

門はすぐに開き、先に門の中に入っていったシャルについていく。

「なあ、シャル」

「なに？」

「俺たちも入ってよかったのか？」

正直な話いつばれるかもわからない、むしろすぐにばれると思う。

「あんなところで放っておくよりはましよ」

確かに、あんなところでフード被ってる男が二人いたらかなり怪しいな。

無駄に長い門から玄関までの距離を歩き切り、扉の前に着き、シャルが扉を開く。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

家の中では左右に一列に並んだ使用人が頭を下げて一斉に挨拶をする。家の外観もすごかったが内装も豪華なもので、細かいところまで手が行き届いている。

そんなことを考えながら家の中を見回していると、シャルが肘で小突いてくる。

「シャル、よく戻った」

「お父様」

家の赤絨毯のつづく先には階段があり、その上から金髪碧眼の男性が下りてくる、今のシャルの反応からすればシャルの親父さんなのだろう。

シャルは前へと歩いていくが俺たちはどうしていいのかわからず、

とりあえず入口で立ち往生していた。

「シャル、そちらの二人は？」

シャルも後ろを振り向き、俺たちがついてきてないことに気付き、こちらへ戻ってくる。

「この二人は、旅の途中で出会った旅の仲間です」

「ほお、うちの娘が世話になりましたな」

「いえ、とんでもない」

実際のところはかなり迷惑をかけられたが、とてもそんなことを言えるような空気ではない。

「誰か、この二人を客人用の部屋へ案内してくれ」

シャルの親父さんがそういうと、女性の使用人が俺たちの前にやってくる。

「どうぞこちらへ」

俺たちは促されるままその女性についていき、部屋へと案内され、俺とソルドの二人だけになる。

「あー、なんかつかれた」

そう言いながら、ソルドはソファーに座りこむ。俺もそれに続くように、隣のソファーに座る。

「ああ、俺もなんか疲れた」

なんかもう、この客人用の部屋だけで暮らせるのではと思うくらいに広い。

「なあ、ソルド、俺たちここでばれたら間違いなく死ぬよな？」

「怖いこと言うなよ」

ああ、なんで俺はこんなところに来ちまったんだろう。もう帰りたい。

そんなことを考えていると、扉がノックされる。つい、おどろいて姿勢を正してしまった。

「失礼するよ」

扉を開けシャルの親父さんとシャルが入ってきたので、俺たちは立ち上がろうと腰を浮かせる。

「ああ、掛けたままでいてくれ」

「あ、はい」

俺たちが掛けなおすと、目の前のソファーにシャルと親父さんが座る。

面と向かっているというのにフードを脱がない俺たちは、不審すぎやしないか？　とりあえず何か言い訳をしとかないと。

「少々顔を見られたくないもので、このままで失礼します」

「いや、気にしないでくれ」

よし、なんとかこのまま行けそうだ。

「今回は娘が世話になったようで」
「いえいえ、ただ付いて来ただけですよ」
「ご謙遜なさらずに」

いやいや、あなたの娘さんが付いて来ただけ、だから何の間違いでも謙遜でもないですよ。

「名乗り送れました自分はカイン、こちらのものはソルドと申します」
「おお、これは私としたことが名乗り遅れてしまいました、シャルの父親でジャイルと申します」

本当にこれがあのわがまま娘の親なのだろうか？　礼儀もなってるし、この親からこの子が生まれる訳がわからない。
とりあえずこれ以上長居する理由もない、適当に切り上げて帰るとするか。
帰るというその一言を言おうとした時、ジャイルさんが口を開く。

「今日は泊まっていきますよな」
「いえ、旅の途中ですので」

敵地に泊まるなんてとんでもない、そんなことしたら朝には死体になってそうで怖くて眠れやしない。

「しかし、ここから近隣の街までは半日以上かかりますし、野宿よりは泊まっていった方が良いですよ」
「いや、ご迷惑でしょうし」
「とんでもない、娘が世話になったのでこの程度ではとても足りません」

今から急いで帰れば俺たちの街まで、せいぜい7時間だが魔人の街に行くなどといえるわけがない。
俺はソルドに視線を向け、助けを求める。

（おい、どうする）
（俺に聞くなよ、お前がなんとかしろって）

くそ、この馬鹿に助けを求めたのが悪かった、こうなったらシャルに頼るしかない。
シャルに視線で語りかけるが気づきやしない、これだから素人は！
俺が諦めようとした時、部屋の扉が突然開かれる。

第7話　そいつは勇者で小さくて

「シャルーーーー」

そう叫びながら部屋に飛び込んできたは、深い青色のショートカットの髪と同じ色の瞳を持った少女で、シャルと比べて胸はちいさ……もとい、控えめである。

服装は上の服の丈が妙に短くへそが出ていて、下もかなり短いズボンをはいている。

「エ、エルザ！？」

おそらく知り合いなのだろうが、なぜだろうこのエルザという少女泣いている、泣いて喜ぶほど久しぶりの再会だったのだろうか？

エルザは泣き顔でそのままシャルに抱き着くが、身長差がすごいな俺が１７５くらいでシャルと１５センチくらいの差で今エルザとシャルの差が２０センチくらいだから……１４０！？

「エルザ？　どうして泣いてるの？」

「だって、シャルが魔王を倒しに行ったって聞いて……」

「うん、行ってきたよ？」

「魔物にやられちゃったんじゃないかって……」

「そ、そこら辺の魔物なんかにやれれるわけないじゃない」

「だって……シャル弱いから……」

ああ、確かにこんなのが魔王倒しに行ったって聞いたら、死ぬんじゃないかって思うよな。

シャルも苦笑いしかできないって感じだな。

それからしばらくは、シャルがエルザを泣き止ませようと必死だ

った。

なんとかエルザは泣き止み、周りを見て状況が理解できたのかジャイルさんに頭を下げる。

「す、すみませんジャイルさん」

「気にするな、シャルのことを心配してくれてたのだろう？」

次に俺たちの方を向くが、首をかしげる。

しょうがない、自己紹介ぐらいはしておこう。

「旅の道中でそこのシャルと出会いましたのでここまで一緒をしたもので、自分がカイン、こちらの者がソルドです」

それを聞いてエルザは何かを理解したようだ。

「じゃあ、あなたたちのおかげでシャルは……」

その続きを言おうとした時シャルがエルザの口を塞ぐ。

たぶん続きは『生きて帰ってこれた』とかだろうが、そんなことを言われたら命の恩人として、もてなされてしまう。もっとも、シャルは単に自分の情けない話を、親に聞かれたくなかっただけだろうが、ナイス判断だ。

ちょうどよく話もそれた、今なら逃げれる。

「では、我々はこのあたりで」

今だとばかりに俺たちは歩き出そうとするが、前に進まない、いや正確には前に進めない、エルザが俺のマントをつかみやがったせいで、フードが脱げそうである。俺は必至でフードを押さえるが、

このままではマントが破ける、この小娘小さいなりしてなんて力だ。
「エルザさん、離していただけないかな？」
「せっかくなんだから、うちに泊まってきなよ」
こいつもか、こいつも俺たちをこの死地にとどまらせようとするのか。
「いえ、迷惑でしょうしいいですよ」
「大丈夫、家は宿屋だから部屋はたくさんあるよ」
そっちが大丈夫でも、こっちが大丈夫じゃないんだよ。
あ、ソルドが逃げようとしてる。
「ソルド、お前」
「カインお前のことは忘れない」
そう言って、扉を開けようとしたソルドの腕をジャイルさんが掴む。
「何も、そう急ぐことはないではないですか」
ざまぁみろ、お前だけ逃げれると思うなよ。
結局俺たちは逃げることなどできる訳もなく、エルザの宿に厄介になることになった。
俺たちの前を元気に歩く小娘の後ろを、うなだれながら歩く。
「それで、なんでシャルまでいるんだ？」

うなだれている俺たち二人の横を何とも気まずそうな顔でシャルが歩く。

「あんたたちの正体がばれたら、私もタダじゃすまないのよ」

なるほど、俺が死ぬときはこいつも道連れなわけだな。というかソルドがさっきから無口だとおもったらなんか死んだ魚みたいな目してるよ。

「それであの小娘はなんなんだよ」

「私の親友よ」

「親友にしては随分、歳が離れてるんだな」

「エルザは私と同い年よ」

俺が驚きの表情を向けると、あきれたような顔でシャルがため息を吐く。

「エルザは、背はちいさいけど、実力は私なんかと比べ物にならないくらいに強いわよ」

「嘘だろ？」

「本当よ」

あの、ちびっ子がそんなに強いのか？　確かにさっきの力はすごかったが。

「ほら、三人とも早くー」

笑いながら手を振るエルザは、とてもそんな風には見えなかった。

街の一番下の段まで下りてきた俺たち、下に降りてきたほうが街

は活気があり、店も多い。
俺たちの前を歩いていたエルザが立ち止まる。
「ここが私の家だよ、少し待っててね、お母さんに話して来るから」
そういって、店の中にエルザが消えて行った。
どうやら一階は酒場になっているようで、まだ昼間だというのに騒がしい。
雰囲気はシャルの家に比べれば豪華さはないが、俺たちにとってはこれぐらいのほうが気楽で、ちょうどいい。
「入ってきていいよー」
そういいながら、エルザは勢いよく扉を開け、店から飛び出してくる。
俺たちはエルザに背中を押されながら、店の中へと入った。
店の中には、酒を片手に騒いでいる人々の声が響きわたっている。普段ならば俺もその輪に加わり酒を飲むところだが、敵の中で酒を飲めるほど俺の精神は太くはない。取り合えず酒場は無視して、エルザの先導に従い二階へ上がる。
「カインとソルドはこの部屋を使って」
「わかった」
「シャルは私の部屋でいいよね？」
「うん、それじゃあ二人ともまたね」
「ああ」
そう言って部屋から出ていく二人を確認して俺たちは、ベッドに

倒れこむ。

「なあ、ソルド、俺もう疲れたよ」

「もう、帰りたい……」

実際のところ、そんな簡単にばれるとは思っていないが、それでも敵地にとどまるなんてしたくない。

とりあえず、風呂にでも入ろうと思いマントを外し放り投げた時、扉が勢いよく開き、エルザが飛び込んでくる。

「言い忘れてたけど、晩御飯は6時からだよー」

「お、おおそうか」

「ねえ、なんでそんな格好してるの？」

今、俺は頭から布団にもぐりこみ、体だけがベッドの外に飛び出している状況である、何とも情けない格好だがマントは、もう手の届くところにはないのでこのまま動くわけにはいかない。

「そう言えば、ずっとフードで顔隠してたよねー」

「す、少し見られたくないからな」

「ふーん、気になるなー」

やばい、こういう反応をしたときは大抵……

「えいっ」

「ちょっと、やめろ」

エルザは、布団を剥ぎ取ろうとしてくるが、事前に予想し備えていたのでなんとか耐える。

「いいじゃない、隠し事はいけないよー」

やばい、エルザって本当に力強い、このままじゃ……

『もう、無理だ』そう思ったその時、突如として爆音が響き渡った。

第8話　街は攻められて色々やばくて

「何が起こったの！？」

そう言ってエルザは布団から手を放す。俺は布団の隙間からエルザが、窓を開け外を見ていることを確認し、マントを拾いフードを被る。

どうやら外で何かあったようだが、さっきの爆発音、どうも穏やかな感じではなさそうだな。

ソルドもベッドから起き上がり、窓から外を見ている。

「3人とも大丈夫！？」

シャルが慌てて、部屋の中に入ってくる。どうやら、シャルも状況を理解してはいないようだ。

「私たちは、大丈夫だけど……」

エルザの顔色を見た限り状況は、かなり芳しくなさそうだな。

とりあえず俺も窓から外の様子を見てみると、街の入り口にあった鉄製の門がなくなっており、その周辺には瓦礫が散乱し、土煙が上がり、火の海と化している。

「一体、何が……？」

そう言った瞬間に、土煙と火の海が吹き飛ばされるように消え去る。そして、そこを黒い目と髪を持った魔人を先頭に魔人の軍隊がゆっくりと進んでくる。

軍隊が掲げる軍旗は黒一色、これを見て俺はその先頭の人物が誰

なのかを理解する。

「おい、カイン」

「ああ、だがなんで……」

なんで、あの方が人間の街に？

「どうかしたの？」

エルザが聞いてくるが、あの方のことを知っているなどといえるわけがない。

「いや、ちょっとな」

エルザとシャルがこちらに疑いの目を向けてくるが、話す訳にはいかない。

「魔人めが、殺してくれる」

窓の外から聞こえてきた声に、シャルたちの視線は再び窓の外へと向けられる。

どうやら、勇者のうちの一人が、あの方へ剣を向けているようだ、そんなことをしたら……

「なんだ貴様は？　そこをどけ」

「どかせるものならどかしてみろ！」

勇者はそう言って、駆け出す。確かに動きはいい、そこら辺の魔人なら一人で仕留められただろうが、今回は相手が悪すぎる。

「邪魔だ」

あの方がその一言と共に、軽く手を振り上げると勇者の体は青い炎に包みこまれ、悲鳴すら上げずに倒れ、消し炭となる。

その様子を見てエルザとシャルが口を手で押さえ驚き、一歩後退りする。

当然だ、まさか、人が一瞬で消し炭になるなんて、普通ならとても考えられない。

他の勇者たちも信じられないといった顔をしながら、後退りする。

「そうだそうやって道を開けておけばいい？」

その言葉に反応して、プライドがあるのか勇者たちが一斉に駆け出す。

「愚か者どもが」

あの方が手を横に薙ぐと、迫って来ていた勇者たちの上半身と下半身が切り離される。勇者たちは、しばらく苦しみ、のちに沈黙した。

すでに残りの勇者たちは戦意を失い、後退りし、道を開け、そこをあの方が歩いていく。

いったいあの方が、何をしに来たのか確かめないと。

「ソルド、いくぞ」

「おう」

「待って」

走り出そうとする俺達をエルザが呼び止める。

「私も行くわ」

エルザは覚悟を決めた目をしている、連れていたら間違いなくエルザも、あの勇者たちと同じ目に合う。

「ダメだ、そもそも俺たちは様子を見に行くだけだ、二人はここで待っていてくれ」

俺は、それだけを言って部屋を飛び出した。

道に出ると、あの方の姿は、見えるところにはないが、まっすぐ進んだのならば階段を上ったはずだ。俺達は、極力目立たないようにしながら街を登っていき、3段目の中心おそらくはこの国の王がいるであろう城へと向かう。

城の入り口では、門番であったであろう兵士二人が氷の彫像と化していた。俺たちはそれを無視して城の中へと侵入し、凍った兵士を目印に進んでいく。

3階への階段の途中まで来たときに、あの方の声が聞こえてきた。

「人間の王よ、今回は貴様らに宣告をしに来た」

「き、貴様は何者だ」

「そうか、名乗っていなかったな。我は魔人の王」

「ま、魔王だと、魔王は確かに打ち取られたはず。なぜ生きている」

「貴様がそのことを知る必要はない」

兵士たちの声が聞こえないあたりもうやられてしまったのだろう。

「人間の王よ、われはここに宣告する。今より100日の後に、我は人間を滅ぼす、それまでせいぜい絶望しているがいい」

「そんなことができるものか！」

「ここに来るまでに我に触れられた者はいなかったが？　それでも出来ぬと申すか？」
「ぐっ……」
その時、階段を自分の背丈よりも大きい大剣を持ったエルザが駆け上がってきた。一瞬、俺たちのことを見たが、そのまま無視して階段を上っていく。
「魔人、お前は私が倒す！」
馬鹿、そんなことしたら死ぬぞ。俺はあわてて階段を上りだす。
「また、邪魔者が入ったか」
そう言って、あの方が手を上げる。その瞬間に俺は加圧魔法を横方向から全力でエルザ発動する。
エルザは横に吹き飛び、エルザの居た場所に青い炎が吹き上がる。
エルザは壁に勢いよくぶつかる、助けるためとはいえやりすぎたかもしれない。
「まだ、だ……」
まだ立ち上がろうとするエルザを、上からの圧力により、押さえつける。
「ほお、今のはお前がやったのか」
「はい、あのものは私の連れです、どうか今回はお見逃しください」
俺は片膝をつき頭を下げる。

「礼儀をわきまえているではないか、そうだなお前の礼に免じて人間にチャンスをやろう」
「チャンスといいますと？」
「人間と魔人が共存できるということを示せ、我は城で待つ。地図はここに置いておく、まあ、我を倒しに来るのでもかまわないがな」

そう言うと、あの方は俺の横を通り過ぎ、そのまま階段を下っていく。俺は足音が聞こえなくなったのを確認し、エルザにかけていた魔法を解く。

「大丈夫かエルザ？」

俺はエルザに手を差し伸べるが、その手をエルザは払い退ける。

「なんで邪魔したの？」
「お前ではあの方には勝てない」
「そんなのは、やってみないとわからないじゃない！」
「もし、俺が助けなかったら今頃炭になっていたやつが何いってんだよ？」

俺がそれを言うとエルザは悔しそうにうつむく。

「とりあえず、一旦帰ろう」
「ごめんなさい……」

落ち着いたのか、急にエルザはしおらしくなる。
さっきまで隠れていたはずのソルドが、後ろから近づいてきてエルザに向けて言葉を発する。

「まあまあ、そんなに落ち込むなって。それとそこは『ありがとう』

だろ？」
「そうだね、カインありがとう」
「どういたしまして」
俺たちが帰ろうとすると、太ったおっさんが俺たちを呼び止める。
「お、おいお前たち、どこに行くつもりだ！？」
こいつが人間の王か、こんな堂々としてないやつが王とは笑えるな。
「帰りますけど？」
「他のものが来るまで、わしを警護しろ！」
俺が呆れて、ため息をつき断ろうとすると、それよりも先にソルドが動く。
ソルドは、走りながら転送魔法を使い、長槍を手元に呼び出し、切っ先をおっさんの首に突き付ける。
「おっさん、俺らはあんたの下僕じゃねぇぞ？」
ソルドの迫力に圧倒されおっさんは口をパクパクさせ、動けないでいる。
ソルドは槍を手元から消し、こちらに振り返り歩き出す。
俺も何も言わずに、階段を下りていく。
エルザは少しオロオロしていたようだが、おっさんに一礼して、後ろから付いて来た。

第9話　あいつは宿にいて俺は説明して

俺たちが部屋に戻ると、シャルが目に涙を浮かべ、エルザに抱き着く。

「エルザ、心配したんだよ」
「心配かけてごめんね、シャル」
「それにしても、シャルは来なかったんだな」

俺がそういうと、シャルはムッとした顔をする。

「来るなって言ったのはカインじゃない！」
「いやあ、エルザが来たから、来るかと思てったんだがな」
「だって、エルザにも来るなって言われたんだもん」

確かに、シャルは危ないから来ないほうがいいな。
そんなことを思っていると、エルザがこちらを向いて口を開く。

「それで、カイン説明してくれる？」

やっぱりそう来るか。
シャルは事態がわかっていないようで、戸惑いの表情を浮かべ俺とエルザを交互に見ている。

「え、何、なにかあったの？」
「カインはあの魔人のことを知ってるみたいだからね、そうなんでしょ？」

もう隠すのも無理そうだな。

「ああ、知っている」
「それなら、教えて。あの魔人が誰で、なんでカインが知ってるのかを」

おそらくはエルザはもう、俺たちの正体に気付いている。それでもなお、態度を変えずにいるのは、確信を得てから始末するためなのか、それとも俺たちのことを信頼してなのかはわからないが、俺は信頼してみようと思う。

俺は、フードに手をかける。もしも、エルザが俺たちのことを、敵とみなしたらと思うと手が震えるが、俺はその恐怖を押し殺し、フードを脱いだ。

俺の顔を見ても、エルザは別段驚いた様子がないが、代わりにシャルがうろたえている。

「やっぱり、魔人だったんだ」
「黙ってて悪かった」
「ううん、気にしないで。もし、初めて会った時に聞いてたら殺してたかもしれないし」

さらっと、怖いこと言うなこのチビッ子は。

「今は殺さないのか？」
「うん、シャルだけじゃなくて私の命の恩人でもあるもの。恩をあだで返すようなことはしないよ」

ひとまずは安心だな、さてじゃあ続けるか。

「あの方が誰かってことだったな？」
「うん、あんなに強力な魔法を易々とつかうなんて、いったい何者なの？」

確かにあの方は、普通なら使えただけで、周りから尊敬と畏怖の念を集めるような魔法を簡単に使っていたが、あの方なら納得だ、だってあの方は……

「魔王だ」

その言葉を聞いて、エルザの表情が疑問の色に染まる。

「魔王だったら、今までだって私たち勇者は倒してきたけど、あんなに強いなんて聞いたこともないよ？」
「今までお前たちが倒してきた魔王は、正確には魔王じゃない」

シャルもエルザも、余計に訳が分からないといった感じの顔をする。

「今まで魔王を名乗ってた奴は、あの方を除いては全員『魔王候補』であって正確には魔王ではない」
「そんなの知らないわよ！？」

今度はシャルが口を挟んでくる。

「まあ、少し落ち着いて聞いてくれ。今まで倒してきた存在は魔王候補、俺たち魔人の間じゃ通称『偽王』、それでさっきこの街にいたのが通称『真王』。まず、俺たちが王であると認めているのは、真王様だけだ。真王様は昔、自分の王位を継ぐにふさわしい人材を探すために、あるお触れを出した」

正直な話、魔人たちの中の機密事項をここまでばらしていいものなのだろうか？　まあ、いいや。

「人間を滅ぼすか、人間との共存関係を作り出したものに、自分の王位と王の力を与えるってな。魔王になれば不老不死なうえに、強力な魔法を自由に扱う力とドラゴン１００匹ですら倒す軍隊が手に入る、当然、強欲な奴は王位を狙うわけだ。でもな、魔王の座を狙ってるやつらは必ず魔王を名乗ることが、条件の一つだったんだよ」

そこでエルザが手を挙げ、俺の言葉をさえぎる。

「不老不死なら魔王の座を受け渡す必要な無いんじゃないの？」

「そんなことは知らん、真王様に聞いてくれ」

エルザの言うことはもっともだが、だれも理由など知らないのだろうから答えられやしない。

「とりあえず、続けるぞ。魔王になりたいなんていう野心の塊みたいな奴らが、人間との共存なんて面倒くさい方法をとる訳もなく、ほとんどの偽王は人間を滅ぼそうしたらしい、そのおかげで魔王を名乗れば人間は敵とみなして襲ってくるから、余計に共存なんてできなくなっちまう。ついでに、本物の王でもないやつにつき従うやつもいないから、数が足りなくて人間には勝てない。それの繰り返しが今まで続いて来たんだよ」

最近じゃ、殺されるのが目に見えてるから魔王候補もほとんど出てこなくなったがな。

「でも、それだと魔王を名乗る人間がたくさん出てこない？」

とエルザが疑問を口にする。
「紛らわしいからって殺しあって、一人に絞ってたらしいぞ」
「そうなんだ」
エルザの顔が引きつってるが、まあ、たしかに殺し合いなんて聞いていい気分はしないよな。
「とりあえず、真王様のことについては、あらかた説明し終わったが、何かまだ聞きたいことはあるか？」
一瞬、エルザが考え、何かを思いついたような顔をする。
「真王の城ってどこにあるの？」
なるほど、人間が生き残るためには知っておかないといけない情報だな。
俺は地図を取りだし、広げて見せる。
「ここだな、まあ基本は誰も近づかない、というか近づけない」
「どういうこと？」
「この城の周りにはドラゴンの住む山脈、危険な魔物だらけの樹海や砂漠そのほかにも行くまでに危険なところを通らないといけないから、望んで近づこうとするやつなんていやしない」
シャルが地図を見ていて、何かに気付いたようだ。
「この城って、海側から行けば何も問題ないじゃない」
「ああ、説明し忘れてた、海から行くと船ごと魔物に食われるぞ」
「船ごとって、じゃあ無理じゃない、ていうか、なんでそんな城の

話してるのよ！？」

ああ、そうかこいつは知らないのか。

俺は、城で見聞きしたことを、シャルへと伝えると次第にシャルの顔色が悪くなっていく。

「――ということだ」

「何よ、それ！？　城にも行けないのにその上、共存できることを示せですって？　そんなの、無理だから死んでくださいって言ってるようなもんじゃない！」

「まあ、確かに無理難題だが、そうしないと本当に滅ぼされるぞ？」

真王様なら、いつでも人間のこと滅ぼせたんだろうな、きっと……

「とりあえず、俺たちは外の様子が落ち着いたら帰るから、頑張れよ」

そう言って俺はベッドに転がると、シャルとエルザが部屋を出ていく。

「カイン、お前どうするんだ？」

「どうするって。帰ってのんびり暮らすよ」

「嘘つくなよ、お前はあいつらのこと見捨てられるような奴じゃないだろ？」

確かに、俺はあいつらのことを見捨てられるような精神をしていない、お人好しといえばそれまでだが悪人よりはよほどましである。

「でも、今回はどうしようもないだろ？」

「さあな、やってみないと何もわかんねぇだろ？」

俺は、そのあと何も言えなかった。

あいつらのことを、このまま見捨てられない気持ちを持っていることは確かだ。

さて、どうしたものか……

第１０話　俺たちは話し合って、指針は決まって

結局、寝付けずに悩み通したが、何もいい案は浮かばぬまま、朝日は昇る。

隣のベッドでは、ソルドがいびきをかいて寝ている。こいつは突然、核心を突いたことを言う、おかげで余計にあいつらを見捨てられなくなっちまう。昨日、今日出会ったような相手だというのに、俺もお人好しだな。

俺は、カーテンの隙間から差し込み、俺の顔を照らした光の眩しさに目を細め、ベッドから降りてシャワーを浴びに行く。

俺がシャワーを浴び出てくると、ソルドは寝たままだが、シャルとエルザの二人が部屋に来ていた。

「鍵は閉めてたはずなんだが？」

「ここ、私の家だよ？」

エルザの右手には、おそらくこの部屋の合鍵であろう鍵が光っている。客の部屋の鍵を、勝手にあけるなんて、何ともいらないサービス付きの店だなここは。

「何か用事か？」

「用事がなければ、わざわざこんな早朝には来ないわよ」

「それもそうだな、それで用ってのは？」

俺はそう言いながら、髪を拭いていたタオルを近くのハンガーにかける。

「私たちを案内して」
「どこへ？」
「真王の城までよ」

またこいつは、昨日の話を聞いてなかったのだろうか？

「無理だ、俺はドラゴンなんか倒せないし、ついでに言えばそのほかの魔物も強けりゃ無理だ」
「私が倒すからいいわ」

俺は呆れて声も出なかった、エルザが言うならまだしも、シャルが倒すと言い放ったのだ、そりゃ驚くだろ。

「時間さえ、稼いでくれれば私が倒すわ」
「あんなクマの魔物も倒せないやつが、ドラゴンを倒せるのか？」
「シャルは確かに、剣を振らせたらなにも切れないし、弓を放てば味方に当てる上に、魔法も発動が遅くて役に立たない」

エルザさん、横でどんどんシャルが落ち込んでいってますよ？

「けれど、魔力量ならすごいんだよ」
「魔力量がすごくても、魔法発動できなかったら意味ないだろ？」
「だから、時間稼ぎしてって言ってるのよ！　悪かったわね、一人じゃ何もできなくて！」

シャルさん逆切れはやめてください、それにボロクソ言ったのは、エルザであって俺じゃない。

「じゃあ、シャルは上級魔法を何百発も打てるってのか？」

そんなでたらめな魔力量じゃなきゃ、ドラゴンなんて倒せないってのに、こいつらは解ってるのか。

「うーん、上級だったら一万発ぐらいかしら」

「い、一万！？」

なんだそれでたらめとかじゃなくて、ほぼ無尽蔵じゃねぇかよ。

「すごいでしょ」

とシャルはすごく偉そうに胸を張る。

「ああ、驚いた。まさか、それほどとは思ってなかった」

「シャルはね、一人で大規模魔魔法つかえちゃうんだよ」

大規模魔法って魔術師が百人ぐらい集まってやるやつだろ、どんだけでたらめな魔力量だよ。

「確かにそれなら、ドラゴンも倒せるな。ちなみに発動に、どれくらいかかるんだ？」

「上級なら3分、大規模なら15分くらいよ」

「なげーよ、15分もドラゴンから守れるかよ！」

「守りなさいよ、それぐらい！」

「それぐらいって……」

確かにそれだけの魔法ならドラゴンも倒せるが、15分も戦えるなら、その間に逃げれるだろ……

「ちなみに、真王様の城までたどり着けたとして、どうするんだ？」

「どうするって……どうにかするのよ！」

やっぱり、こいつは全く考えてなかった、いや、思いつかなかったのか。

「そこが決まらない限りは、どうすることもできないだろ。魔人と人間が共存できることなんて、どうやって証明するんだ？」

「じゃあ、魔族との間を取り持ってくれない？」

なるほどまずは、共存関係を築いてからってことか、でも……

「それは、無理だ」

俺の答えにシャルが必死な顔で頼み込んでくる。

「おねがいよ」

「お前たち人間が、勇者を名乗ってどれだけの魔人を殺してきた？お前なら自分たちを殺した相手が、死にそうだから助けてくれと言ってきたら助けるか？」

「それは……」

シャルもエルザもうつむき、言葉が出なくなる。

「あれ、なんで二人がいるんだ？」

どうやら、ソルドが目を覚ましたようで、あくびをしながら伸びをしている。

「真王様の城に案内するか、魔人たちとの間を取り持ってくれないかって、頼みにきたんだよ」

二人の代わりに俺が説明をする。
「おお、いいじゃんどっちもやってあげようぜ」
「「「え！？」」」
「でも、魔人たちは人間のこと、嫌いなんでしょ……？」
とエルザがおびえたように言う。
「嫌いな奴もいるだろうけど、別に気にしてないやつもいるだろ。戦ってるやつらなんて自分から戦いに行ってんだし」
「ソルド、そうはいっても上手くはいかないだろ？」
「やってみねぇと分かんねぇじゃん。大体、いっつもカインは難しく考えすぎなんだよ」
ソルドが単純すぎなだけじゃないのか？
「あ、でも取り持つのは無理かな」
突然、思い出したような様子のソルドに、エルザが声をかける。
「どうして？」
「だって、俺もカインも辺境の町の外れに住んでるだけの一般人だし」
うん、そう言えば俺たち、全員を説得するような立場にいないんだよな。大体魔人たちってそんなに偉いとかって意識、真王様以外に持ってないし。
「確かに、よく考えたらそうよね、こっちでだって、一般市民が突然魔人を連れてきても、間なんて取り持てないもの」

「そうゆうこと、とりあえず真王様の城か、一回行ってみたかったんだよなぁ～」

こいつ、真王様の城への道のり解ってるのか？

「それでカインはどうするんだ？」

俺が放っておいても、こいつらは間違いなく、真王様の城まで行くんだろうし、しょうがない、俺もお人好しだな。

「わかったよ、とりあえず、俺たちは帰って準備とか、しなきゃいけないけど、迎えに来ても街は入れないだろうし、どうするか……」

俺が迷っていると、エルザが言葉を発する。

「2、3日待ってくれたら、私たちなら街を出れるよ」

それまでここにいるのか、恐ろしいが、連れて行くならそれしかないか……

「わかった、しばらくここで世話になるよ」

なんだかソルドに乗せられたような気がするが、見捨てるのも心が痛い。こうなったら、とことんまで付き合うか。

でも、城についてからどうするんだろう？

「はらへったー、朝飯食おうぜー」

ソルドはいつも通りの様子だな、全くこれから大変になるっての

に解ってるのだろうか？

まあ、とりあえず今は飯だな。

第１１話　俺は貧乏で金は必要で

俺とソルドは、むやみに外に出る訳にもいかず、宿の自室でババ抜きをしていた。

「なあ、カイン」

「なんだ？」

「二人でババ抜きしてても、相手の手札がわかってるからつまらないな」

「そうだな。お、そろった」

「また、負けたー」

これで今日の戦績は３２戦３０勝２敗、いい加減、別のゲームをしたいが難しいゲームになるとソルドはついてこれないので、ババ抜きで我慢している。

俺はベッドに転がり、枕に顔をうずめる。

「暇だな」

ソルドがそう呟く、俺も同感である。

昨日の朝シャルたちを待つことを決めたが、唯一の楽しみはエルザが運んできてくれる、飯ぐらいなもので、基本的には暇である。

俺は、ベッドの上で転がり仰向けになり、ふっと思いついたことを口にする。

「そういえば、ソルドは旅の準備する金あるのか？」

「金はないけど、鎧とかはあったはずだぞ」

ソルドは大丈夫そうだな。しかしまいった、俺は軽装の鎧がいいが、そんなもの持ってない上に、買う金もない。

「俺は鎧と盾、買わないといけないからなぁ……」

ついでに言ってしまえば、旅の間の宿泊費その他もろもろも必要なのだが、人間と魔族の通貨は違うみたいだから、シャルたちの金は使い物にならないし。

そんなことを考えていると、部屋の中にノックの音と同時にシャルの声が響く。

「入るわよ」

「ああ、いいぞ」

俺がそういうとシャルとエルザが扉を開け部屋の中へと入ってくる。

シャルは俺とソルドがベッドの上に寝転がっているのを見て、ため息を吐く。

「あんたたちもう少し、緊張感持ちなさいよ？」

「常に気張ってたら、やってられねぇっての。それで何か用か？」

「旅をするにもお金かかるでしょ、だからそのことについて話し合いに来たのよ」

なんとも、タイミングのいい奴らだな。

「そのことなら、ちょうど考えてたところだよ。でも俺金ないから

鎧とか用意したら、それだけで金なくなるし、人間の通貨、俺たちのと違うみたいだから、困ってたところだ」
「なら、何かお金になりそうなもの用意する？」
「そうしてくれると助かるが、いいのか？」

少し、申し訳なさそうに、俺が言うとシャルはまるで気にしてない様子で口を開く。

「別にいいわよ、もともと私たちの為なんだから気にしないで」
「じゃあ、頼む」

そのあと話し合った結果、明日の朝食後にシャルの家に行き、魔人たちの間で高値で取引されるものを選ぶことになった。

――時間は過ぎて次の日の朝

俺たちは部屋で朝食をとり、今はシャルの家へと向かい歩いている、まだ早いためか、あまり人通りはないので、比較的安心して歩くことができた。

「相変わらず、でっけー家だな」
「ソルド、もう少し静かにしてくれ」

まだ人通りが少ないからといって、目立つことはしないに越したことはないというのに、こいつは分かっているのだろうか？

「ほら、早く入ってよ」

俺たちはシャルに促されるままに、門をくぐり、シャルに続き、裏口から家の中へと入る。

「ここは倉庫か？」
「ええ、何かよさそうながあったら言ってね。大体は大丈夫だけどダメなものもあるから」

俺とソルドは、とりあえず倉庫の中を探してみるが、あまり金になりそうなものはない。まあ、倉庫にしまっておくようなものなのだから、当然と言えば当然だ。
もう、ろくなものはないんじゃないかと思いながら、ある布袋を開け俺は驚く。

「おい、これって魔石だよな？」
「ええ、もう小さくなりすぎて使い物にならないけど魔石ね」

魔石は魔力が固体になったもので、光属性の魔石なら5センチほどのかけらでも10年は発光し続けるほどの魔力を含んでいるが、1ミリほどの大きさになるとただの水晶のように何の効果ももたらさなくなってしまう。その種類は豊富でどれも応用すれば生活においてかなり便利なものになるが、高価なため一般家庭では、ほぼ使われていない。
俺の目の前には、もう1ミリほどになってしまってはいるが、魔石が袋の中に大量に入っている。

「この袋は光属性か、こっちは水、これは火、種類ごとに分類されてるのか」
「それでその魔石がどうしたのよ？」
「これっていらないのか？」
「いらないわよ、もう使えないし」

なるほど、人間はもうこうなったら使わないのか、なら……

「これで金はなんとかなりそうだな」
「何、笑ってんのよ？」
「これ、俺たちの間だったらかなり高価で取引できるぞ」
そう言って俺は魔石の入った袋を持ち上げる。
「どういうこと？」
「まあ、少し見てろ」
そういうと俺は転送魔法で、手元にランタンを取り出す。しかし、そのランプは本来芯のある位置に芯がなく、代わりにガラス玉のようなものがある。
俺は、光属性の魔石を一掴み、ランタンの下部の燃料を入れるスペースへと放り込み、摘みを回すと、ガラス玉が光り出す。
「え、どうなってるの？」
「こいつは、小さくなって使えなくなった魔石を、直接魔力として使うことができるんだよ、他の魔石も別の道具で使えるから、どんな魔石でも最後まで使えるんだよ」
そう言いながら俺は、摘みを先ほどと逆に回し明かりを消す。
シャルとエルザは、まるで信じられないといったような表情でこちらを見ている。
「魔人の技術ってすごいんだね、それを実現しようとして私たち人間は１００年以上も研究してるのに未だにできないんだよ？」
「俺も仕組みは分かってないがな」
そう言って笑って見せる。

「そういうわけだから、でかい魔石程じゃないが、こんな小さいのでもそれなりの値段で取引されるんだよ」

これだけの量があれば、かなりの値段になる。これで金の心配はなさそうだな。

「それなら、店に行ってみる？　魔石をカットして売ってるからそうゆう小さいのなら沢山あるはずだから、安く買えるわよ？」

「おお、なら行こうぜ」

こりゃ、ぼろ儲け出来そうだな。

シャルの言うとおり店では魔石の細かいものは、ゴミとして扱われているようで、研究資料に使いたいと言ったら格安で譲ってもらえた。

「いやー、これで金の心配はないな」

そう言いながら、俺はベッドに倒れこむ。

あのあと何軒か店を回ったら、軽く各種1キロは集まった。ソルドはどれほどの値段になるのかもわかってないようだが、これだけあれば一財産築ける。

「ところで、鎧って言ってたけど、やっぱり親方のとこか？」

「そりゃ、親方のところだろ」

「でも、親方作ってくれっかな？」

たしかに、親方は気難しいからな、何か手土産でも持っていかないといけないな。

とりあえず、その日もまたババ抜きをして残りの時間を過ごした。

第１２話　時は流れて、俺は帰ってきて

「ああ、やっと帰ってきた」

俺の目の前には、木造一階建てのなつかしき我が家。たった数日だけだったのにすごく懐かしく感じる。

「ちょっと、何、ぼさっとしてんのよ」

まったく、せっかく人が感慨に浸ってるってのに、空気の読めないやつだな。

「はいはい、どうぞお入りください」

そう言って、俺は入口を開け、３人を我が家の中へ入るよう促す。

「おじゃましまーす」

うん、礼儀がなっていたのはエルザだけだったようだな。
そんなことを考えながら俺も家の中に入り、扉を閉める。

俺がテーブルの方を向くと、すでにシャルとソルドが我が物顔で椅子に座っている。

「カインー、お茶ー」
「ソルド、お前に出すお茶はない。エルザ座っててていいぞ」

そういいながら、俺は台所に向かいお湯を沸かし始める。後ろからは三人の談笑が聞こえてくる中俺は、なにかお茶請けはなかった

かと思い、棚をあっちこっち探して、なんとかクッキーを見つけ、それと一緒に４人分の紅茶をお盆に乗せて運ぶ。

「ほら、お茶が入ったぞー」

全員にカップを渡し、俺も席に着き、紅茶に口をつけ、クッキーをつまむ。

「シャルとエルザは、準備できるまで俺の家使ってくれ」
「いいけど、ここに3人は厳しくない？」
「ああ、それなら安心しろ、俺はソルドのとこ行くから。一応聞いとくが、エルザは料理できるだろ？」
「うん、できるよ」
「じゃあ、今から街行って準備とかしてくるから。誰も来ないと思うが、扉は鍵かけてあけるなよ」

そう言って俺は、残りの紅茶を飲み干し立ち上がる。

「おい、ソルド行くぞ」
「おう、わかった」

ソルドは紅茶を飲み干すと、口いっぱいにクッキーを頬張り、立ち上がる。
俺はそのまま家を出て、鍵を閉め街の方へと歩きだす。

「もご、もごご」
「飲み込んでから話せ」

そういうと、ソルドは口の中のクッキーを飲み込む。

「親方になに持ってくんだ？」
「とりあえず高い酒でも持っていけば喜ぶだろ？」
「親方酒好きだもんなぁー」

俺とソルドは街で魔石をいくらか売りその金で酒を買い、街の外れにある工房へと向かう。
とりあえず入口の扉をノックする

「こんな偏屈ジジイのところに来る変わりもんは、一体誰じゃ？」
「ガキの頃、よく悪戯して怒られたソルドと、その連れ添いのカインです」
「なんじゃお前らか、手が離せんから入るなら入れ」

お、どうやら今日は機嫌がいいみたいだな。これなら作ってくれるかもしれないな。

「お邪魔します」

中に入ると、身長１２０ｃｍほどで、その体躯は逞しく、筋骨隆々と言った表現がピッタリであろうの白髪の老人が、金槌で真っ赤に熱せられた金属を叩いている。

親方は一瞬だけ視線をこちらに向けすぐに、視線を戻し仕事を続ける。

「何の用じゃ？　悪戯なら余所でやってくれ、今は忙しくてかまってやれん」
「いや、今日は悪戯じゃなくて注文に来ました」

一瞬、親方の金槌を振るう腕が止まるが、すぐに再び動き出す。

「お前が注文とは、いったいどういう風の吹き回しだ？　いつも、防具も武器も支給品で十分だと言っていたではないか？」
「少し面倒くさいことになって、まともな装備が必要になってしまいまして」
「ほお、お前さんが、まともな装備が必要なことをするとはの」
「色々ありまして」
「とりあえず、こいつを殺しておくか！」

そういって、親方は熱した金属をはさみ状の道具でつかみ、近くで何かをいじっていたソルドに向けて突き出し、ソルドが飛び退く。

「あっぶねー、殺す気かよ？」
「殺す気じゃ」

ソルドのやつ、少しはじっとしてられないのか？
親方はその金属を再び火の中に入れ、熱し始める。

「それでカイン、貴様は何が欲しいんじゃ？」
「軽装の鎧一式と、全身を覆えるくらいの大きさの盾、あとはナイフが2本ほど欲しいです」
「どのくらいの質のものにする？」
「できるだけいいものを」

再び、火の中から金属を出し叩きはじめる。

「かなりの金額になるが払えるのか？」
「払えます、だからお願いします」

親方はこちらに顔を向け、見定めるかのように俺のことを睨み向

きなおる。

「5日後に取りに来い」
「そんなに早く作れるんですか？」
「急いでおるから、わしのところに来たんじゃろ？　あと、酒はそこにおいていけ」
「分かりました、では5日後に」
「分かったなら、さっさとそこのバカを連れて出て行け」

俺はソルドを工房内から蹴りだし、自分も工房を出る。
鎧と盾とナイフを5日で作ると言っていたが、一体どうするのだろうか？　とりあえず、これで装備のことは問題ないな。

俺はそのあと食材を買い家へと戻った。

「ただいま」
「おかえりー」

エルザが出迎えてくれたが、シャルはベッドの上でゴロゴロしている。

「そういえば、ベッドは一つしかないから、二人で話し合えよ」
「私は旅で野宿とかに慣れてるから、毛布だけで大丈夫だよ」
「そうか、じゃあ、そこの寝袋使ってくれ」
「ありがとう」

それにしても、エルザはいい子だな。

「小さいのにえらいなー、エルザは」
「小さいって言うなー！」

その怒声と同時に、エルザの回し蹴りが目にもとまらぬ速度で俺の腹部に決まり、俺は壁に打ち付けられ、動けなくなる。
小さすぎて子供に見えるくせに、力だけは子供とはかけ離れすぎだ。あと、小さいって言うのはやめよう、俺が死ぬ。

俺がなんとか回復し、晩飯を作り始めるとエルザが手伝ってくれるが、その様子が……

「どう見ても、お手伝いする子供にしか見えないよな……」

聞こえないようにボソッと呟いてみたのだが、どうやら聞こえたようだな、だって今、俺壁際で倒れてるもの。

「そうゆうことばっかり言ってると、女の子にもてないよ？」
「そうだぞカイン、いくらエルザが小さいからって、小さいって言っちゃ、げふっ」

ああ、ソルドのやつも壁まで吹き飛んで行ったな、でもあいつ頑丈だからなー

「なにすんだよ、俺はエルザの味方だったじゃないかよ！？」
「小さいって言った、でしょ！」
「今のは不可抗力だ、子供じゃないんだからそれぐら、ごふっ」
「子供っていうな！」

今度は天井にぶつかって……落ちた……あ、立ち上がった。

「なにしやがるこのチビー、チビエルザー」

そのあとも晩飯ができるまで、ソルドがエルザのことをチビと言い、そのたびにエルザがソルドのことを吹き飛ばしていた。
できれば、屋外でやってほしかったがそんなことを言ったら、俺にも飛び火しそうだったので黙って晩飯を作る。

第13話　俺はのんびりしてこいつものんびりして

「ごちそうさま」

シャルがそう言ったのに対し「お粗末さま」と返しながら、流し台で食器を洗う。

食事中に、装備が完成するまでに五日かかることは伝えてあるが、よく考えると時間の期限の百日のうち十日余りを準備だけで費やしてしまうのは、仕方ないとしてもなかなかに痛い。

「はい、これ」

そう言いながら、エルザがシャルの使っていた食器を持ってきてくれた。

「さんきゅー、エルザ」

俺はエルザが運んできてくれた食器を受け取り、それを流し台の中に置くと、エルザは隣でタオルを持ち、俺が洗った食器を拭きはじめる。

「エルザも向こうでくつろいでていいぞ？」

「一人じゃ大変でしょ、手伝うよ」

とエルザはいいながら、次の食器を拭きはじめる。

エルザは本当に働き者だな、それに比べてあの二人は……

ソルドは椅子に座ったまま、食事を食べ終えて満足したのか満面

の笑みを浮かべており、シャルはもうテーブルに用はないといった様子で、ベッドの上に転がっている。

俺はため息を一つ吐き、最後の一枚の皿の水を切る。

「後は俺がやっておくから大丈夫だぞ」

俺はそう言いながら、タオルで手をふく。

「うん、わかった」

そう言って、エルザはタオルを俺に渡してシャルの方へと向かっていき、何やら話し出したようだ。

俺は食器を拭き終え、シャルたちに声をかける。

「じゃあ、俺はもうカインのとこ行くな。風呂はもう使えるようになっているから、自由に使ってくれ」

そう言って、いつのまにか椅子に座ったまま寝ていた、ソルドの頭を叩いて起こし。寝袋を一つ持って家の入口に向かう。

「家は出るなよ？」

「わかってるわよ」

といいながら、さっさと出て行けと言わんばかりに、しっしっと手で払うしぐさをした。おそらくは風呂にでも入るのだろう。

俺はおやすみとだけ言い残して、ソルドを連れてソルドの住処まで向かう。

森の中を進むこと数分、ソルドも目が覚め今では一人でしっかりと歩いてくれている、夜は少し肌寒いな、などと考えながら歩いていると、一張のテントが見えてくる。

「おお、懐かしの我がテント」

そう言いながら、ソルドはテントの入り口を開け飛び込む。

「じゃあ、お邪魔します」

といって、テントの中に入り、意外と片付いていることに少し驚く。広さは縦横に2．5メートルぐらいでなかなかに広く、テント自体には特にいたんでいるような様子もない。

「風呂入るか？」

「ああ、たのむ。それにしても珍しく片付いてるな」

普段ならば、そこらじゅうに物が散乱しているというのに、一体何があったのだろうか？

「旅するなら、転移のために片付けておかないといけないだろ、ほれタオル」

そう言って、俺にソルドがタオルを投げてよこし、風呂桶とランタンを持ってテントを出ていったので俺もそれに続く。

俺とソルドは、すっかり暗くなり月明かりが差し込む森の中をランタンの明かりを頼りに進んでいく。

「お、あったあった」

そう言ってソルドが小走りになったので、俺もそれに続いて小走りになる。

「久しぶりだなここに来るのも」
「カインはあんまり来ないからな」

そう話す俺たちの目の前には、露天の岩風呂が湯気を立てていた。
ソルドが、風呂が欲しいとテント暮らしのくせに騒ぎだしたのが、3年ほど前、なぜか俺まで手伝わされる羽目になり、あっちこっちを掘ること3か月まさかのまさかで温泉を掘り当て、それから整備すること1か月完成したのがこの露天風呂である。
せっかく、温泉を掘り当てたというのに、テントを移動させたくないといって、ソルドは結局温泉までの道のりの数分を毎回歩いているらしい。

「いい湯だなぁ～」
「そうだな～」

俺たちがゆっくり温泉につかって、のほほんとしていると、何かの足音が聞こえてくる。

「ああ、やっぱりまだくるんだな～」
「こない日はないよ～」

カンテラの明かりによって、近づいてくる者の姿を確認すると先日、シャルを襲っていたのと同種の狼型の魔物であった。

「せっかく、くつろいでるのになぁ～」

そう言いながら、ソルドは火弾を飛ばして魔物を一匹燃やす。

当然、こういう種類の魔物が一匹だけなはずがなく、すでに周りを囲むように数匹が待機している。

「めんどくさいな～」

そう言いながら俺は加圧魔法で、横方向からの力で一匹を吹き飛ばす。

「ほんとだよな～」

こんどはソルドがそう言いながら、転移で手元に出した槍で、飛びかかってきたうちの魔物を薙ぎ払う。

これがこの温泉の優位つの欠点である、ゆっくりお湯につかっていると、いつのまにか魔物たちがやってきて襲ってくる。

まあ、大したことはないからいつも適当にあしらって、逃げていくのを待つだけだが。結局この日も数分間、圧倒的な力の差を見せつけると魔物たちは退いて行った。

「さてじゃあ、あがるか～」

ソルドがそう言い、俺たちは風呂をあがり、テントへと帰る。

テントへ帰ると、特にやることもないので、すぐに俺たちは寝袋に入った。

朝になり、俺が目を覚ますと珍しくもうソルドが目を覚ましていた。

「珍しいな、お前の方が先に目を覚ますなんて」

「ああ、なんか目が覚めちまった」

そう言いながら、ソルドは目を擦りながらあくびをする。
「まあ、さっさと朝食杭に行こうぜ」
「そうだな」
そう言って俺たちは、テントを出て俺の小屋へと向かう。
小屋について、ノックをする。
「おーい、カインだけど入って大丈夫か？」
俺がそういうとしばらくして、鍵が開いた音がしてエルザが扉を開けて「おはよー」と言ってきたので俺たちもそれに返してから、家の中へと入っていく。
朝食を作るつもりで、来たのだが、テーブルの上には、すでに朝食が用意されていた。
「あれは、エルザが作ったのか？」
「そうだよー、たぶん来るだろうと持ってたから作っておいた。あ、シャル起こしてくるね」
そう言って、エルザはシャルのもとへと行き、揺すりながら何度も呼びかけるが一向に起きる気配がない。
「無理みたい、先に食べちゃおー」
「そうだな」
あいつの寝起きの悪さはよく知っている、昼になってやっと起き

てくるような奴だ、朝に起こそうとしたらかなりの根気がいる。

そんなシャルなど放っておいて、俺たちは朝食を食べだす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1322z/

俺は魔人であいつは勇者で

2011年12月25日12時55分発行